

Pensoj flugas traus la land - limon

Senryu Zasshi

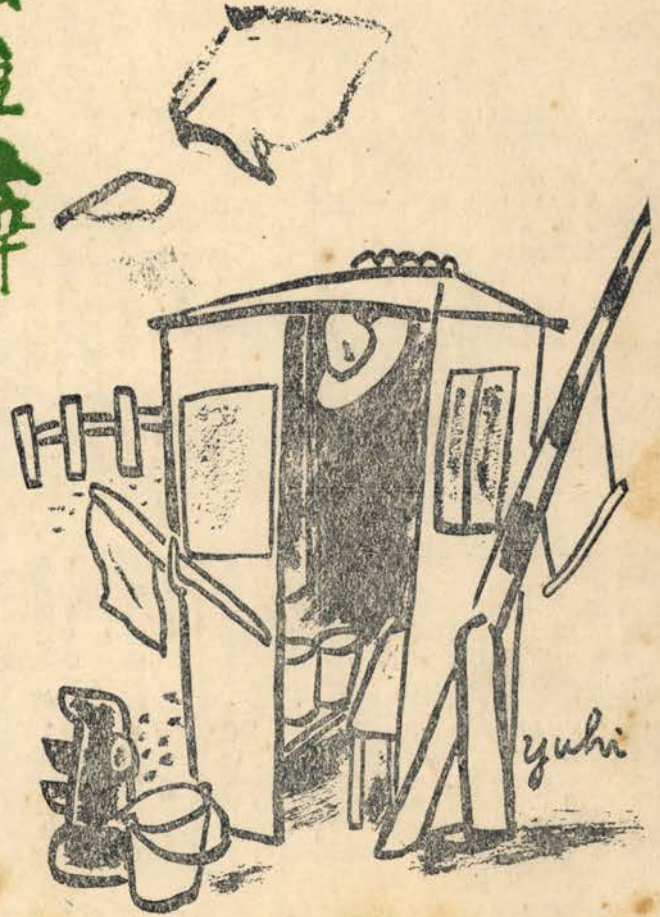
麻生路郎☆主宰

川

柳

の 旗

証



六月號  
No.277

昭和廿二年十月一日創刊  
昭和廿五年六月一日發行  
第三萬四千七百六十六號  
(每月一編一日發行)  
創刊大正十三年・通卷二百七十七號





# 川柳航路

——談 座——

出席者

- 麻生 茂乃
- 高鷲 亞鈍
- 須崎 豆秋
- 大西 野介

棺桶へ入れる着物の柄を撰

豆 秋 川柳家ではありませ  
んが、戦後派と言はれてゐる  
私の友人に「どうだい君人情  
味豊かな良い句だらう生前本  
人が好きだった柄を撰つて入  
れてやらうと言うんだ」と言  
うと、その男が言うのに「それ  
は君全然反対だよ、どうせ捨  
てゝじまふのだから一番つま  
らん柄を撰つたんだ」と、こ  
の句をまるで裏返してしまひ  
ました。そこで私も一寸考へ  
ました。そんな風に解釈すると、  
この句の焦点も言うべき柄  
と言う一字の考へ方で句全体  
が動くと言ふことになるので  
すが、皆さん如何ですか？

野 介 柄と言ふ文字は撰る  
人の愛情を表現してゐると考  
へる方が正しいのではないで

せうか。

野 鈍 着物の柄を撰る愛情  
が正しいと言ふ野介氏の見方  
は我々もさう探りたい。おそ  
らく戦前派でしかないものゝ  
共通点ではありませう。そ  
う言う見方が川柳を解釈する意  
味に於て必ずしも正しいと言  
う訳のものではないと私は思  
うのですが、腹乃さん、どう思  
はれますか？

腹 乃 此の句は一番悪い着  
物を撰つて入れると判断する  
よりも、やはり死んだ者に一  
番よくうつる柄を撰つて入れ  
てやつたと判断するのが常識  
的な判断だと思ひます。私は  
この句を読んで死んだ者に対  
する執着が現はれてゐる人情  
味のある句であると思ふと同  
時に、これは私の感じですけ  
れども、又別の事を考へてゐ

ました。どんな綺麗な柄の

着物を入れてやつたにして  
も、死んだ者には一寸もわか  
らないそれに柄を撰るのに骨  
を折ると言うのは結局自分の  
心を慰めてゐると言うことに  
なります。人間は何処までも  
目に見える物で解決をつけた  
がる。佛壇にお線香を上げる  
のも自分の心の慰安であつ  
て、それが佛の爲になるのだ  
とは考へられませんか。こんな  
事を同時に考へてみたわけ  
です。

野 鈍 所謂言つた様な考へ  
方はですね、それ等が、やつば  
り戦前派の持つ唯神の乃至は  
精神的な裏づけから来る処の  
解釈でせうな。戦後派の若い  
青年達、豆秋さん、その人  
は若い人なんですか。廿才前  
後の人と違ひますか？

豆 秋 廿四、五才のインテ

リあんちやんですな。  
野 鈍 そんな若い、おそ  
らく嫁さんもなくまして父親  
になつた経験もない人が、戦  
争を通して死のお粗末な冷酷  
な場面を見て来た人には野介  
氏の言うやうな愛情は、この  
句からは読みとらないで、川  
柳の今一つの要素と言つても  
いゝ非情さと言ふものを掴み  
取つても、それは川柳を解す  
の自由さだと言つていゝんち  
やあないかと思ひます。

腹 乃 所謂言ふ見方を誰も  
が許す現代の世相であつたと  
したらその解釈も間違つてゐ  
るとは言はれません。ですが  
川柳はその人の体験によつ  
て、どうにでも解釈出来る句  
もあるわけですよ。

北風に新聞配りが押されて

野 介 此の句は骨の髄まで  
も浸み透るやうないゝ句だと  
は思ひませんが、これの解釈  
によつて私の川柳に対する考  
へへの一端を語らしてもらふ爲  
に提出させて頂きました。こ  
の句は多分十三か十四位な小  
さな男の子が背中に北風を受  
けて新聞を配りに来る姿を描  
写されてゐるのだと解釈致し  
ますが、これを単に「押され  
て来」と表現することにによ  
つて、それが具体的に示されて  
ゐるばかりでなく、作者のそ  
の新聞配りへの愛情がこの句  
の背後に感じさせられます。若

しこの下五を例へば「凍えさ

う」と言う風な直接的な生な  
表現をさればこの句は單なる  
甘いものとなつてしまひま  
す。処が作者がその対照に対  
する愛情を、さり氣なく「押  
されて来」と表現してゐる処  
にこの句の川柳らしいよさが  
あるのだと私は思ひます。つ  
まり川柳が人間実存に關して  
持つてゐる愛情は直接的なも  
のでなくて何等かの否定によ  
つて表現されてゐる処に川柳  
の川柳らしさが成立するもの  
と考へます。前句の批評で非  
情と言ふ言葉がありました。が  
川柳の持たねばならぬ非情性  
とは激しい愛情を氷のやうな  
冷さに表現する処にあるのち  
やあないかと、最近私は考へ  
るやうになりました。

野 鈍 此の句のテーマは、  
テーマである新聞配りが子  
供であると言ふ野介氏の想  
定から北風に「凍る」と言う  
直接な言葉でなしに「押さ  
れる」と言う否定的な言葉で  
持つて愛情を汲み取ると言  
う御意見には、僕は考へ及ばな  
かつた訳だが、これを新聞配  
りが子供でなく、いかつい大  
人と解釈した場合、僕はすら  
つと読んだ範囲では大人の新聞  
配りと思つてたんだが、  
北風に押されると言う言葉は  
少し大袈裟でひつかゝるんだ  
けどなあ。

野 介 押されると言うたら  
やはり子供だと解釈するのが







肺になるから好きなことさ  
しなはれ 豆 秋

と云う句です。  
野 介二平凡な会話の一節と  
か、通俗小説の中の一行とか  
が、そのまゝ、川柳になると言  
う処に川柳の特有な大衆性が  
あるのですね。

雞の目にダイヤもつゝくも  
のに見え 千舟

腹 乃二これは何ですなあ、  
雞の習性を借りて同時に人間  
の慾望も此処へ表した句です  
な。此処へダイヤを持つて出  
たのでこの人の仕組が生きて  
来たのですな。これに就いて  
何か御意見があつたら言つて  
下さい。私はもうひつくるめ  
て簡単に言うてしまひまし  
た。

亞 鈍二僕など雞の目なんか  
どんな目をしてゐるのかわか  
らない程忙しい生活だし、又  
暢氣な人間とも言へるのだ  
が、皮肉ぢやないけん、奥  
さんの場合はゆつくりとした  
人間でありながら、細かい小  
さな処、先に奥さんが雞の目  
をヒナの目と言つて梨里ちや  
んから「それはトリの目よ」

と言はれたのは余談として、  
トリから一段と小さいヒナの  
目まで観察を細かくする奥  
さんの見方にやはり川柳人と  
しての鋭さがあつてダイヤモ  
ンドも光るといふものだ。こ  
の句、僕は初め何のことやら  
解らなかつた。  
野 介二つひ見過ごしてしま  
ふやうな句に、その句の持つ

てゐる本当のものを発見し、  
それを拡大して見ているのが此  
評家の立場ですが、そんな意  
味で私はこの句を見過してゐ  
て奥さんに前に突きつけられ  
てこの句の意味が解りました  
。仲々鋭いものを持つてゐ  
る句でありこの句の意味は奥  
さんによつて言ひ盡されてゐ  
ると思ふす。



# 煙 草

弘津 柳 慶 選

妥協点見えてたばこの火をつける  
吸つてくれた煙草の紅のあと  
配給になつて初めた其です  
吹殻を拾ふて生きる道もあり  
勤勞の悔なき夕伺に紫煙の輪  
煙草ゆら／＼春の野へ溶けていき  
煙草喫ふ女事務別な目で見られ  
煙草吸ふ女へ路次つたそがれる  
煙草ぐらゐ吸ふてほじうもの人  
紫煙もう／＼金議もつかるはかりなり  
愛情の技巧煙草を吹つかける  
刑事さてたばこの粉も見逃さず  
妓の煙草畫の離れにビール酌ぐ  
ゲームセットまつた様に煙草つか  
煙草錢とも言はれない金詰り 十九平

よく通る煙管で一ぶく喫うた味 緑 郎  
叱られる顔へまともに煙が来 大 一 路  
金策に來たのがピース喫んでる 光 郎  
喫みさしを探す留守居の股火鉢 同  
ある日ふと社長のあとを給仕すい 柏 葉  
湯上りの煙草へしごけなく坐り 莖 丈 子  
煙草すて、喧嘩の姿勢整へる 同  
草に寝て雲に煙草を吐きかける 元 骨  
殘業の疲れ煙草が短かすぎ 同  
氣前よく喫殻捨て、スリは乗り 山 雨 楼  
家計簿へちと引しめる煙草代 同  
あの頃は煙さえ出れば満足し 鈍 味  
頂上に来て一服を深く吸ひ 智 水  
拂つても男國々しい煙草 光 江  
月末に訪へばきさみを喫つて居り 万 年  
吹殻を林立させて言ひそびれ 芦 穂  
ごん底の生活になれたモク拾ひ 正 一  
マツチかしてからちよちよて汽車の旅 薺 花  
寢煙草へ妻の夜業の灯がまとも 魅 光

## 課題吟

間煙草ちいさい声が賣りつける 如 川  
月末の煙草半分づつに喫ひ、日濤子  
煙草の火借りて噂の仲間入り 柴 天  
無爲無策煙草は既に喫ひつくし 正 司  
画布余白残して煙草の火をさし 同  
禁煙をすれば値下げが決りかけ 東 夢  
チエンパンジー煙草吸ふ手、覺えたり 同  
男など吞んでかゝつた煙草の輪 鐵 兒  
一服の時は税金語り合ひ 月 一 路  
失恋へ煙草の苦い日が続き 加 代  
草に寝て喫えば煙が雲となる 淑 郎  
一渡り酌いで仲居は煙草にし 徹 郎  
煙草喫ふ女性で話題なほつきす 葉 光  
パン／＼の浮世をすれた煙草の輪 七 面 山  
佳・同権へ妻は煙草をのんで足り 湖 月  
未亡人の煙草屋へ借りが出来 七 面 山  
配給の煙草はたどの様に喫ひ み ち 子  
言ひ切つた自信煙草の火をつける 孤 峰  
本心を偽る煙草に火を点ける 苑 女  
軸・巻煙草女將は万事心得る 柳 慶

てゐる本当のものを発見し、  
それを拡大して見ているのが此  
評家の立場ですが、そんな意  
味で私はこの句を見過してゐ  
て奥さんに前に突きつけられ  
てこの句の意味が解りました  
。仲々鋭いものを持つてゐ  
る句でありこの句の意味は奥  
さんによつて言ひ盡されてゐ  
ると思ふす。  
豆 秋二この句の主體はむし  
るダイヤではないでせうか、  
ダイヤモンドも雞の目にかゝ  
つたら三文の値打もなく、ダ  
イヤの悲哀を嘲笑したやうに  
もされまふが……  
腹 乃二三文の値打もないと  
言うことは、人間の考へたこ  
とです。(笑声)  
野 介二つゝくものにしか見  
えない。「喰へる」とせず  
「つゝく」とした、ために雞  
の動作がわかつて來ます。  
豆 秋二兎に角批評もまた創  
作なりで、この句をつゝくし  
出した腹乃さんに敬服致しま  
す。  
亞 鈍二問題は奥さん自身が  
雞の目を持つてゐるダイヤを  
つゝくんでせう(笑声) 僕な  
んかは、蝟の目を持つてゐる  
墨を流すだけだ。——蝟に目  
あるのかなあ  
腹 乃二そりやありますよ。  
豆 秋二それでは此の辺で、  
筆記も墨に流してもらひませ  
う。

(梨里筆記)





大阪府 中島生々庵

医者嫌ひとほせぬ父の氣の弱り  
役得の折詰さげた日がつゞき

熱弁に恩師の眼鏡さえてくる  
会費だけ飲んだつもりが酔ひつぶれ

ホームから唾の学校霞む中  
黙すれば佳し一生を黙さんか

彼氏というて娘たち話する  
追つかけてゆけばホールにも居らず

自由行動何か費用てくる生徒  
利用する時だけいやに祭り上げ

金出ぬとなれば掌返へすよう  
困る時だけ助太刀を頼みに來

名が賣れりや昔の友と言ふが來る  
四十九日経にぬに牧師の前に立ち

二度の縁先夫好みが膳の上  
腐れ縁ですとカナカへ呉れてやり

男女同権なれば慰籍料辞退せよ  
キリストの前で結んだ仲なれど

この辺にも家があるよとランプの灯  
だましてる事に女は陶醉し

平塚市 木村 孤浪

区對整理近道どつか行つちまひ  
郵便の來ぬ日看護婦に少しすね

買った当座の紙に晴衣をまだ包み  
深か酒を友情ちつと見つめ居り

合櫃を打つ丈けにしておく社長  
ボン曳きの近よつてくる髭かいな

玉子の値にかゝはらず雞餅をたべ  
孝行のしおさめといふ温泉につかり

定期がされる花の四ヶ月  
大牟田市 高田 抱逸

大牟田アパート  
アメリカ博ねらい古着を賣るつもり

醜の娘へ養子捜すも親心  
布哇 市岡 曉舟

鳩胸と調和のどれたハイヒール  
乳房だけ自慢のようなワンピース

迷信と思はないから石も撫で  
大牟田市 市場 沒食子

宿題へ母つき合の繼をあて  
暖冬に窓も水菜も臺がたち

金詰り工場の煙たなびかず  
勤め口きまらぬまゝに卒業し

詩に歌にオールドミスに春は憂き  
名古屋市 吉田 水車

男娼のいつそ眞面目があらはれなり  
ひきようとは知りつゝ男呑むばかり

四月三日妻入院手術を受く  
人命は尊し看護婦の汗

看病の窓に生駒も久しぶり  
バツターのそれも内輪の女子野球

大阪府 西尾 栗  
大阪府 須崎 豆秋

いまだ未ださんねん袋提げ歩るき  
見も知らぬ人へライタをすつてあげ

氣ちがひを眞似てびつくりさしたるか  
桃の字が思ひ出せずにおかしけれ

初対面民生委員をしています  
鶏を貰つてもらう長病ひ

退職金子がずらりつとまだ小さし  
外人向のホテルが此処へ建つ櫻

夜櫻は二人で歩く幅になり  
神戸市 竹内 潮花

藤の下お師匠さんの恋を聞く  
嫁つた娘が残りの夢を書いて來た

大阪府 北川 春巢  
おでん屋の足の届かぬ椅子で酔ひ

親類中へ嫁の癩膜症が知れ  
どや／＼と二等熱海でからになり

奈良縣 尾崎 方正  
春悲しいつまで続く独り身の

ボロ服へ春の光の明るすぎ  
窓口で編む手を止めた女事務

來客へ独身確切り持つて立ち  
同権へ急にかつうなつた顔

大阪府 菊沢 小松園  
覆水が盆に帰つて又孕み

幕間に株の値を聞く文樂座  
出世した友達ばかり名刺呉れ

双蝶々用窓の場  
封権の法にも涙あるものを

姫路市 夷 一笑  
せわしさに花の散るの氣がつかず

子の寝顔つく／＼かいしよなく想ひ  
大阪府 橋本 美奈子

凡人でいゝ子宝の背を流し  
女湯の方ののれんに風があり

どの母も背丈の高い子と歩き





はつきりと女になつた肩に触れ

大阪市 水谷竹莊

貞操のこともふれる倦怠期  
失業の大人を笑ふ靴磨き

兵庫縣 小西無鬼

割烹着良夫の好きなものを煮き  
春だ踊りだ敗れた國と思はれず

誕生日

今日の旗我が手で樹て、楽しけれ

長男大學入試バス

石松の口調で激励しといたる  
老らくの時々甘えられてよし

布施市 糸本醉月

小氣味よし税務署長のリコールよ  
税務署へ氣兼ねいらすの國旗立て

岡山縣 山分淑郎

醉ざめを所望する程もてなされ  
もう汽車が見えて跣足の痛いこと

大阪市 福島正則

來る春を心で待つて灯をともす

共学の男の語尾をまねてみる  
吾が子にも願はずる製粉所

手を組んで歩く相手のないズツク  
木炭車エンコの時間もみて発車

大阪市 富岡淡舟

善良な市民税金天引かれ  
毎朝の道にたんは、咲き初め

政黨も店も看板塗り替へる  
農家の皆様買出しにはもう行きません

觀世音ばさつになつた母の顔

物を煮る音の恋しい旅の宵  
奈良縣 飯降白香

出張の旅費も家計に繰り込まれ  
乗客を台無しにしてストライキ

敗けたのも知らない様な暮し向き  
疑ひの目は史蹟にも届き出し

晚酌に父の過去をも一寸知り  
山口縣 長野井蛙

折匏宿の女中の知る重み  
わが手相易者ふぜいに見くびられ

職のある倅せ春の花に坐し  
はたるの光茨の明日が待つて居る

よく晴れた朝赤い花白い花  
ポケットにお通夜の珠数が忘れられ

北山紀行近鉄上市下車バスにて五時間  
春雪にタイヤの跡もくつきりと

春うらゝ三人の子をもてあまし  
女房のぐちもだん／＼春めいて

兎も角も紅一点はおだてられ  
寄る年に勝てず二号を黙認し

歸つて來るだけでもましやと思つてる  
待つてゐるのに靴音は酔つてゐる

重税に青酸カリをふと思ひ  
この子さへなければと言ふ生活苦

本質は知らず政府の肩を持ち  
水泳だ野球だ意識そらされる

大阪市 松江梅里

パトロンがないと言はさぬ銀狐  
出張としてパトロンの御逗留

孕ませて教師は何を教へたか  
教員で立ち青春をふりむかす

男みなうるさきものに見えて來る  
大阪府 伊藤定美

樽の齒の折れを梳くたび佗しがり  
待合室の話そんなら縁続き

春の窓彼氏は肩を抱いて呉れ  
クツションのある箱通動抜目なく

何時何処でどこで女逢ひたがり  
キツスミーなんかをつけて未亡人

女学生色氣づいてか笑はない  
愛情を手紙の数ではかられる

好きと言ふ心植付け君は逝く  
たなごこに君の握手を火と感す

貞操を担保に女金を借り  
タンカ切る女の眉の長かりき

其の女顔に良く似た犬を連れ  
浮浪兒の財布に万の金をみた

キジ一対仲よく暮れにブラ下り  
妻君の虚榮が闇に走らせる

正月かとりも卵を休みたり  
恐しや娘二才で赤を選り

靴磨き師走へ腕を組んで立ち  
持株が騰つたか且那小唄など

鱈一匹冬の足々々を見送りぬ

宇部市 上林粗影





自己批判私は爬虫類に属します  
いつしかに円滑油になつた年を知り  
家主帰つてから啄木の詩を口ずさみ

兵庫縣 石岡 正司

妖精のやうな女を忘れ兼ね  
ライバルも金に詰つて居るらしい

姑は関東弁が気に入らず  
アパートが当り新婚らしく住み

かゝる世に家の廣さを持て余し

大阪市 西森 花村

ガラスにはガラスと書いて家がたち  
泣顔を隠すにエプロン汚なすぎ

睦言を聞かれまいためラヂオかけ

鳥取市 河村 日満子

詰め込めぬ筈婆ちやんがしやがんで居  
食い運のよき賑やかに通される

通り魔の如く税務署引揚げる  
予備知識仕込まれて出る座談会

兵庫縣 田代 尋四

久潤の末は保険に入れられた  
吹殻を探して妻の帰り待つ

兵庫縣 家 沢 薺花

あみだくじの使いへ五十づらさげて  
行く先のある川水のうらやまし

発掘のニュースへ死臭まで感じ  
入口が二つ御料理兼旅館

人氣なくなればお芋のグロテスク  
海に出て海に没る陽の嘲笑き

満員車妻と背丈をくらべてみ

滋賀縣 黄瀬 美秋

鉄工所音の奥から返事をして  
ダンス〜我が家でない音を立て

逢ひたさを社交ダンスにこよせて

迷惑な連れをアベックだと見られ

岡山市 藤本 満年

よく見ればたんぼはボンネット型で咲き  
つゝじまだ小娘ほどの色氣なり

松笠の如何にも浮世捨てたよう  
花ぐもりなどとお天氣不貞腐れ

外勤の内勤親は股火鉢

内勤の外勤親は遊んどり

お別れのキツスのときに咳が出る  
不甲斐なく女の機嫌取つて生き

逃げかくれしてまで恣に溺れどり  
職よこせデモへ一日雇われる

親切な捨てた犬夫で届けられ  
のぼせとるときは小石に蹴つまづき

熊本縣 西口 如川

君の智慧ではあるまいと揶揄われ  
又ストかなどと農村揺れもせず

雑音も聞かず晶を打つてゐる

岡山縣 福島 鉄兒

嫌な客へ見せる化粧とはなりぬ  
一夫多妻難はえゝなとフト思ひ

車掌さんやつぱりカーブでひよろついて  
酒止めりやお前も金語りかと問われ

差押へ花見の留守と知らずに來  
交換手恋の話に忙しい

岡山縣 直原 湖月

恋などはしません顔で薬盛り  
敗戦は吸ガラ拾ひの元大尉

岡山縣 黒田 久米女

應對の妻はばやいた顔でなし  
ねぎびんと伸びて背中へ陽の温み

善し悪しは兎も角末の子をかばい

岡山市 藤本 茶々

腕時計買わたしたまでの恣であり

人の恣氣に病む暇が羨まし

北斗七星だけの知識の母であり  
洗濯をするのよめだかよのいて呉れ

お滝へ吟行

留守の子の分も弁当つくつとき  
本丸で戦國の花吹誇り

大阪市 塩浜 一路

九度の熱吞氣な父も附添うて  
初喧嘩記念する様に飯がこげ

子の爲に社会保障よ進めかし

大阪市 福本 嗣骨

象見せに來て迷ひ子にしてしまひ  
申カツの屋台ふるわせ消防車

池田市 太田 木声

競輪ですつてんでんの色男

今日の生活を猫と相談し  
喰ふ丈けに生きる職場を去難く

大阪市 伊藤 迷宮

仲人の嘘と判つた給料日  
座談会政治の罪にして終り

税務署へ出し損うたすしを食べ

米子市 三鴨 美笑

笑ふこと忘れたように嫁き戻り  
煙草買ふ金もないわと紅を塗り

松山市 前田 伍健

貸し切りの車がいゝきで先へ越し

天皇奉迎理窟などなく正す襟

大阪市 橋本 緑雨

十万円かどポケットに入れて出る  
みりよくある膝でお酒をすゝめて居  
お家柄はどうでもよいと勤めに居  
子を叱る様にはいかぬ他人の娘



# 天皇様と川柳

東野 大八

昔もなくあづき色の御料車が止る、キラリと陽ざしをはじいて扉があくと、れづみ色のソフトをお手に持たれた陛下がゆつくりお降りになる。シングルの濃れづみ色のオーバーのお背中はまるく、お顔はどつじりと大きい。そのお顔は頬からあご、お眼鏡の中のまぶたまでゆつたりとふくよかである。しかし濃い眉毛とお口髭がやはり近より難い威厳にみちている。伊予路ではこのお姿、このお顔にときには春の埃がふりかゝり、雨しづくが光り、また冷たい東風がお髪を毛をみだしてすぎたものである。身近にそのお姿を拜する機会に恵まれた人々は、たゞもう「有難い」「もつたない」ということだけがさきに立ち、声かきりの万歳や君が代の後には涙さえずかんてしまう。

これは何の理窟も文句もない、あるのはたゞ日本人でないといわれない、といつた復雑で測り切れない、切々の想いだけである。天皇を國民の「象徴」とした語調のよつてなす所以がこのときほど、判る氣持に置かれたことはない。

私はこの陛下を迎へて商賣柄愛媛御巡幸の丸四日間、御視察の個所と奉迎場に随行して、つよよに陛下のお人成りに接した。あるときは熱狂する群衆にせかれて陛下のお身体に押しつけられ、あるときはまたお顔の真正面にぶつかかり特別な御全釈をうけたことは一度ではなかつた。記者冥利といつか、何んというか、とにかく私は生涯の思い出に永久に止まるであらう印象のかす／＼をかく体験したわけである。

ところでこの人間天皇様のお人となりだが一語にして申述べるなら「眞白な人間の年齢」を見る思ひであつた。つまり「汚れなき大人の子供」といつた感じである。その特徴の第一は奉迎の人々に向つてのお言葉がきわめて限られた短い言葉に終つてゐることである。「元氣でね」「頑張つて下さい」「あゝ、さう」というのが如何なる場合でも用ひられてゐる。同行の記者の一人はこれを「原始發聲的」といふ、また一人は「印判的發聲」と評してゐるが、陛下は人並以上に複雑な御氣持なのだ、それを卒直に表現されることをお知りにならないだけであると私は思ふ。それといふのは遺族代表や戦災引揚者代表の前に立たれたとき、お白髪に眼に立つこめかみのあたりが、異常なけいれんを持つ筋肉の動きをよく見つけたか



# 宗教である川柳

ガイド博士談をよみて

安川 久留美

四月中旬、金沢に於ける戦没者追悼國民宗教大会に列席すべく來沢せる東大学習院大学教授 R・H・ブライズ博士がその止宿で訪問記者に対し語つた一節に、

「神佛を信ずることはつまり人々を信ずることです。私は日本固有の俳句と川柳にこの平和な境地を見出し、大きなことより、小さなことから一歩々々平和な境地を築いて行くやう努力してゐる……」

と、又當時記念講演中にも、キリスト教、佛教などの弱点を巧みについで、眞の禪の思想を強調、日本古來の俳句、川柳の二つは、一切を超越した本當の平和があると叫び、平和を念願する日本人の進むべき道を説いたやうに新聞紙上で報道されてあつた。私は十年以前金沢に居たという同博士を知らず、たゞこの談話のうちに、俳句と川柳を小さな宗教の一ツとして弁せざる、俳聖、芭蕉は俳句を宗教の心持ちで諸國を行脚した。又、川柳の祖、柄井翁も川柳を大衆にわかつてその妙味を認識し、矢張り念佛を称へると同じ氣持ちに作句を採点したものであらう。

心もちを抱き、衆に接してゐたもので、此二ツの趣味は文學遊戯を超えた小宗教なのである。作者各々の個性から生れた作品によつてその人々を尊敬する所に和やかなグループをつくるもの故、ガイド博士の語る宗教觀の焦点は略々うなづかれる就中川柳は俳句よりも人間生活を主としてその環境を詠むだけに一層宗教に近づき、妙味があふれ「笑」も人生の有つ最大長壽法の一つであることを忘れてはならない。又、季節などをさけて自由に詠むことも民主主義に適した趣味で、徒らに皮肉な他評的作品よりも、各々が有つ個性から現代の生活を「七字化する所に眞の句が生れ、遂には信仰の境地まで到達するのである。一部の階級のみには會得する「文化思想」よりも一般大衆に入門しやすき短文學は所謂博士の言葉のうちの「小さなこと」から一歩々々平和な境地を築く道程」となるわけである。

(四月二十四日)

「言葉の味」

須崎 豆秋

大阪市会で「交通調査が未だに民衆へ、オイ、コラツ」といふやうな言葉を浴せかけるのはけしからん」と市會議員にれぢこまれて鈴木警視總監が「オイ、コラツ」といふ言葉は愛称であるといふ名答弁をして、ワイ／＼物議をかもしたが「オイ、コラツ」といふ言葉が果たして愛称であるかどうかは、物はためしに左側を歩いている調査へわれ／＼が「オイ、コラツ」とよびかけて見たら調査の方がニコツと笑つてくれるかどうか、余りにも大人氣ないはなしであると思つてゐると、又最近の新聞に、ベルシャ猫に雀を與へておびき寄せ殺したところを現行犯で捕えられ、「器物損害容疑」といふ罪名で、裁かれるといふのを讀んだが、「オイ、コラツ」が愛称だつたり「猫」が器物だつたりちよつと常識では考へられない。戦時中にも横文字を排撃して、「ピヤホール」を「麥酒立呑所」と言はせたりして殺風景だつたが、どうも政治家といふものには、言葉の味が解らぬらしい。

最近の年号問題にしたところで、空くらごの番号ではあるまいし、数字をならべただけの一本調子では、時代の感じといふものが出ず、これ亦殺風景なもんではなからうか、「頃は元祿十四年」とか、「壽永の春の櫻狩」とかいふものに時代の味といふものを認めなければならぬ。

かつて、タカクラ、テルが「共產党は、空音、コケおごし、書きつ放し、的外れ、一人よがりの言葉ばかり使つて何が何だかわからないが、もう少し分り易い言葉を





西條啓一 肖像を明説つてつむつて眼でンヨール 皇天るなにきわを

らである。すまない、氣の毒だ、  
 といったひげ目の感じに打ひしが  
 れるその表情に人間天皇の面目が  
 躍如として、私は私に感じ  
 溢れ、私だけのひそかな親しみを新  
 らたにしたものである。  
 このような陛下に対し、川柳人  
 の立場から私が考へることは、世  
 俗、廣い素材の上に立つて豊富な  
 語感と特殊な表現價值をもつて作  
 句されねばならない川柳につい  
 て、陛下は完全 鑑賞面でも先格  
 であらうと思はれる。それは御製  
 の御たしなみもあるかに、が、  
 短歌、俳句の部門においても買え  
 ない氣がする。その理由は詩的エ  
 スプリアが陛下にはまったく見受け  
 られないからである。

眞四角な箱詰の人生、それは綺  
 麗の哀愁にあつても、世情の哀感  
 にはうとい、その白いニユアンス  
 だけがハツキリと天皇様の全身に  
 溢れているとみるからである。  
 天皇様の御製が誰かの代作であ  
 るという一説も行幸中の側近から  
 きいたが、このこともそれらの話  
 を裏づける一つの話であるかも知  
 れない。  
 とにかく人間天皇様はまったく  
 一個の透明な世界の孤獨者である  
 ということがいえず、せめて  
 もの川柳のこまなき味合の一つで  
 もお贈りしたいものである。  
 (昭和二十五年三月 四國巡幸  
 最後の日に写す)

使はなければならぬ」といふや  
 うな意味のことを言っているが、  
 この言葉は其の儘川柳にもあては  
 まるのであるからうか。  
 近頃何とが派、何とが派の川柳  
 で何を言っているのかさつぱりわ  
 からず砂を噛むやうなことがある  
 が、川柳は、なるべく平言であつ  
 てしかも味はひと深さのある言葉  
 を選ばなければならぬやうに思  
 ふ。

### 偶 像

戸 田 古 方

師範畑に育つた私の友人が親切  
 にもこういつてくれた。  
 「君は何かといえはすぐ漫画にし  
 たり、図解したりする癖がある  
 が、生徒にしたら随分迷惑な話だ  
 ……」

活字になつてゐる間は、どんなに  
 でも想像し、解釈する余地を殘し  
 ているが一旦具体的に絵としてし  
 まうと、筆者の主観が入るだけで  
 なく、動きのとれない金縛りに逢  
 つてしまふ。

偶像といふものは教祖の生存在  
 にはなく、没後も純粹な信仰とあ  
 りがれがうすらいでからあらわれ  
 たもので、キリスト教ではキリス  
 トが死んでから、佛教に於ても釈  
 迦が死んでから各々四五百年を経  
 ている。

最初の偶像は技術的な未熟から  
 写實的ではなかつた。だが薄暗い  
 堂奥の燈明の中ではたしかに神々  
 とくも信仰を助ける働きをして來

た。それは必ずしも當時の低い審  
 美眼のせいだけではない。  
 写真が進むにつれ、偶像は信仰  
 から分離しはじめ、純粹藝術と  
 してなごめられる様になつた。  
 ニューヨーク・タイムズを政  
 漫画に引ずられて時々買ひはする  
 が面白いのが半分、むつかしいの  
 が半分である。

アメリカの漫画の中には可成ス  
 ラングで説明語が入つてゐる。ア  
 ロンデイに至つては英和両文がご  
 ちやごちや入りまじつて、子供に  
 「面白」といわれてやつと手に  
 とる始末。

漫画は漫画家の主観とされた  
 知性によつて、たくみに事実と関  
 係とを具象してくるから有難  
 い。  
 漫画の説明的な文字の役割は低  
 くあつてほしく、出来れば無字が  
 のぞましい。文字は民族の特性を  
 もりこんだ分化された言葉であ  
 り、これを理解するには學習を必  
 要とするからである。  
 絵は万国共通語であり、教養に  
 関係なく理解され得る可能性があ  
 る。

ほんとうにすぐれた作品は、二  
 十数億の全人類のものでなければ  
 ならない。  
 偶像のおかげで今日の巨大宗教  
 はいづれも数億の人々をそのもと  
 にひざまづかせて來た。

川柳は日本語という民族語の上  
 に立つてゐるから、そのまゝでは  
 世界性はない。それにしても日本  
 八千方が共鳴してくれる川柳は何  
 句あることやら。

### 閑 話

吉 田 水 車

氣が利きすぎると思つてくれな  
 い人も出來ようし、きりとして陳腐  
 では相手にされそうにない。相手  
 を考えず正直に生地を出して行く  
 のがよいのかも知れない。いのち  
 ある句は難中の難。  
 私の頭は川柳の絶対境を考へて  
 いる。そしてこの樂書が何かそれ  
 に関係していればさいわいである  
 一九五〇・四・一八

**血圧降下には**

**アーグレミン**

定劑注射

血管アウトホルモンとアミン塩類

山之内製薬

百聞は一見に如かずと申すことが  
 ある、教科書に出る「滝」が判ら  
 んのでわざ／＼内地へ滝の實物を  
 見せに子供を連れて歸へつたと言  
 う話は筆者が満洲に居た時のホ  
 ントの話。











もめ事を造つた犬が晝寝する  
 代筆のフト看護婦の眼を恐れ  
 ホームラン 飛石傳ふやうに駈け布 畦東田楼  
 始球式大統領は左利き  
 守備として何等術なしホームラン  
 寝ころんで話す親しさ恋ならず 大阪市葉光  
 老らくの恋をする程儲からず  
 燃え熾る鬨志男の太い眉  
 洋燈へ明治時代の物語り 倉敷市千代男  
 色と艶よる年波は争えず  
 電産のスト需要家の顔さかになで  
 質屋から我が子の様に抱いて出る 大阪市三波子  
 幾人かの眼に五拾銭拾はれず  
 吹殻が拾へと俺に眼交ぜする  
 春うらゝ村を新車のバス走 岡山縣牛歩  
 眞実を言うて外交務まらず  
 病欠と届け見合いの茶を運び  
 小心の彼はふぐちり手も付けず 今治市酔歩  
 時事漫画誰かは苦い顔で見る  
 親友も近寄りたがたい出納課  
 ヤミ米をはかりなをして腹を立て 尼崎市ちか子  
 ヤミ米も今晚たけばしまいなり  
 卵生まぬ鶏だと私たとへられ  
 ドプロクの匂税務署見逃さず 岡山縣秀鶴  
 交際の上手を母は心配し  
 ライバルが病氣で一寸安心し  
 店番は買はぬらしいと見てるよう 金沢市陽々  
 坊のスリルお手手放して二歩三歩  
 無心などするでなれど伯母も死に  
 どんぼりマヤミミサギが撤ちツツ 大阪市恒良  
 靴だけしつかり抱いて酔うている  
 めしなしで泊る場末の腐れ縁  
 畫風呂も閑人ならぬ身に樂し 横浜市智水

猫背して夜の銀座を狭く行く  
 三崎に遊んで  
 雨けむる旅愁の底に城ヶ島  
 終電が出て貞操の危機が来る 豊中市直郎  
 暮がたきを呼びにやまい雨が降る  
 独房の壁に孤独の爪を立て  
 捨てられたと云ふ声になる流行歌 滋賀縣斗志  
 黄昏の遠き山脈女体に似  
 無理な事頼むに椅子を浅う掛け  
 子の寝巻短くなつたまゝであり 岡山縣北路  
 春うらゝマルクス信じた葉書が出  
 税務署の高利貸か中間達はれ  
 二号でもお持ちと妻にあなどられ 布 味純 香  
 惚れられて居たとも知らず宿を替へ  
 釣れぬのは場所をとられたせい  
 英字紙を読む作業衣は見直され  
 旅人のように色街通り抜け 三原市正一  
 失業の鋭刺る朝をさびしまれ  
 投賣りもそろばんおいた上のこと 兵庫縣梧  
 夜勤やと言ふのに邪魔な客が来る  
 ニュールツクよごすまいとて肩がこり 岡山縣無聊  
 アベツクを二つにさいたブルドッグ  
 腹立て、訪へては應接間にチヌーリップ 高知市元馬  
 値下げしてたゞいて賣れは見送る  
 連絡船衝突沈没後  
 どつちにも理があり船は沈みたり 岡山縣梯梧  
 大臣の方言じたばたすなど言う  
 生命より大事とお世辞言ひ過ぎる 下関市勇記  
 人生かく終りぬ紋服の列続く  
 シベリヤ的な表情を持ち兵帰る 愛媛縣敏明  
 冬眠の出来る奴等を羨む日  
 人妻の理性で噂ききながし 高知市桂夢  
 宿題をよつてたかつて寝さすなり

宜に加へ、一日三回に服します  
 と、淋病を治します。效があります。  
 泡ふいて蟹は宿屋の敷居逃げ  
 蟹の穴おとなの意地をつのらせ  
 る (水客)  
 蟹の甲羅焼の料理法を御知らせし  
 ます。先づ蟹を湯煮して甲羅を取  
 つて汚物を去り、能く洗ひます。  
 身をていれいに取つて砂糖塩で味  
 をつけて煎り、玉子の白味で和え  
 て、饅頭の青豆に味を付け、甲羅  
 に詰めます。子は別にして手の平  
 で揉み粒にして黄味で和へこれを  
 詰めた蟹の上に塗りつけ天火と下  
 火で焦げぬ様、むし焼にして出し  
 ます。  
 摺り生姜まじない程は冷奴  
 (久留美)  
 夏の宵よく冷えた絹ごし豆腐の味  
 は夏料理の王者でせう。  
 子供も西瓜を切れば丸はたか  
 (翠峯)  
 夏祭りや夜店と子供と西瓜と、  
 夏の家庭情緒は西瓜からでせ  
 う。  
 西瓜はよく煮詰めますと、とん  
 と餡のやうな溶液が出来ますが、  
 これを西瓜糖と言つて利尿に效が  
 あるとして用ひられてをります。  
 念佛も四五へん入るるごぜう汁  
 (古川柳)  
 さゝがしの午夢のそばで皆殺し  
 (同)  
 鮎はなるべく骨でも食へます丸煮  
 とか、たゞきの方がよゝましいの  
 で、これは貧血症、氣力の乏しい  
 人、夏季汗が出て困る人などに  
 特効があります。  
 乳の薬里から鯉を見舞うなり  
 (古川柳)

高級化粧料容器には当然!

ヤマギンの……

# 黒硝子

大阪東区西四丁目  
 西通一丁目  
 山銀株式會社  
 電話四四七番

ビヤホール

## みどり

上六交又点角西北

鯉の味噌汁は産後乳汁の分泌の少  
 い人に用ひてよくきゝますし、淋  
 病にもよろしい。また鯉の頭、と  
 りわけ鰓を粥といつしよに食べま  
 すと、耳の病、せきのある病氣、  
 腫物によいさうです。  
 鯉のうるこを二、三片脱脂綿に包  
 みまして楕円形のものをしてしらへ  
 痔の痛みますところにあてゝ坐つ  
 てをりますと、痛みが止るとの説  
 があります。  
 鮎釣りに岩から岩へ道があり  
 (五健)

鮎の塩麴にて、酢は誰れでも御存  
 じでせう。  
 鮎の料理、特別にこつた料理の  
 作り方はい書てゐると長くなりま  
 すので、名前だけを、並べて置き



明日も亦開樂風呂の味もよし愛媛縣旭 童  
 たよりないものにラヂオの尋ね人 同  
 入学のとたんに寄附をせしめられ布施市柏 葉  
 お目出度ういわれて女ちよッ 同  
 春なれやアドルム錠は賣切れて大坂市草 右  
 葬式屋あの世の指図受けた様 同  
 末つ子を猫よりましとほめてみた大坂府桃 村  
 灰皿の中まで今日の姿り様 同  
 寝つかれぬグロブ枕のそばに置き呉 市史 球  
 おちよぼ口でどんぶり飯にも動じない 同  
 ガラス戸にまだ〜寒い春の音呉 市紅 兒  
 万國旗の様な娘に春の風 同  
 住職の褒める急須のホロ苦き愛知縣吐 平  
 十代はとつくに過ぎた女の眼 同  
 嘘でなく少しとばして話をし廣島縣元 同  
 病む妻の装ふ笑に笑み返す 同  
 一喝でげんことさかぬとこへ逃げ岡山縣千富彌 同  
 何するか分かれへんでと家出る氣 同  
 一人ツ子卯欠さず膳に居る熊本縣無 六  
 公僕の典型清貧さを悔いす 同  
 万引のいとも涼しき顔でスリ宮崎市卯之助 同  
 アベツクのグリーン地帯を見て通り 同  
 思ひ出すたびに水車軋んで居熊本縣月 仙  
 再婚の氣が再婚は嫌といふ 同  
 親のくせ兒がまさ〜と見せてくれ岡山市忠 美  
 國會にならつて縣議騒ぎ立て 同  
 日記などつけられませぬ女事務滋賀縣喜久江 同  
 ぜんざいの追加いゝかねてる 同  
 病院で花咲くときを二度むかへ呉 市寧 子  
 内職の母にお休み云ふて寝る 同  
 老夫婦話もなく寝るとする高知市一徹郎 同  
 屋台店閣下とやらの奥様で 同  
 シヤンはみな後家ばかり會計課鳥取市秋 男

連想をたくましくする机下の下 同  
 くだびれもせせ賣り出しを繰返し出雲市へとち 同  
 田園に汗して夢を描かざる 同  
 喫ひなれぬタバコを持って旅に出る廣島縣愛 鳩  
 最悪の春立退と税金と 同  
 樂團の誰か違つて居そうなり熊本縣梢 風  
 女子大を出た冷やかな笑ひ様 同  
 記念日へ出された旗に風強く大坂市独 実  
 飲んで来た時だけ無慾な顔で寝る 同  
 親父にもあつた酒癖笑はれる高知縣十四郎 同  
 又一人友を無くした酒の上 同  
 闘病に克つた素足で庭に立ち神戸市曉 夢  
 口だけで寂しがつてるハイヒール 同  
 夢があり不満があつて嫁きはぐれ呉 市梅 香  
 戦後派の娘があつて氣がおけず 同  
 妹と歩くへ野卑な声を浴び熊本市安 彦  
 弟のネクタイ借つて逢ひにゆく 同  
 誘惑に負けてなるかと目をつぶり岡山縣光 江  
 三十三逝くには早き年にして 同  
 口にこそ言わねど嫁の慾しい年岡山縣美能留 同  
 まだ値えてないのに米の割当が 同  
 定期券あの娘に今日は連れがあり熊本縣鶴 堂  
 片思いだつたと思ふ定期券 同  
 呼び捨てのどこやら偉い人に見え滋賀縣季 賛  
 道樂のないのをすこし心配し岡山縣美智子 同  
 女教師も夜はホールの花であり大坂市葉菜子 同  
 日曜日寝たまゝ子供へ返事をし大坂市恵 風  
 頼りない人よ愛してゐると云ふ出雲市まさる 同  
 電車からエンピツのよゝ家が見え兵庫縣英 一  
 朝風呂の煙を立てて、未亡人岡山縣夜 潮  
 長々と簡單ですがの御挨拶新潟縣味 味  
 篤農家思はぬ金が流れこみ岡山縣満 月

ますから、ぜひこの内の一つの鮎料理を召上りたいと思はれる方は私に直接、御問合せ下さい。料理の秘傳をお知らせします。鮎の竹芝むし、みぞれ鮎、鮎豆腐、子持鮎、南禅寺揚げ、鮎の黄味鮎、南蛮焼、船場煮、鮎田樂、鮎の洗ひ、吸物、背越鮎の物等は鮎料理のうちの美味なものばかりです。料理暦も秋から初めて冬、春、夏と書いてきましたが、夏の巻もこれで終りといたします。

この間に古川柳から選らんだ江戸時代の食味の味を句を通して見ませう。

この上の良薬はなき飯と汁  
 喧嘩には勝つたが亭主飯を焚き  
 柏餅配つて来ては一つ食ひ  
 冷飯を見いゝ内儀米を出し

豆腐屋は時計のやうに廻るなり  
 西瓜賣首実験のやうに見せ  
 新世帯疊の上で味噌を摺り  
 現在の食味の味は  
 御飯で主人の氣嫌なほしたり  
 (和水)  
 汚して見せて地卵と言ふ時代  
 (吐平)  
 夏瘦せへ今日どやが芋の配給日  
 (彩葉)  
 公に吞めてビール値が高し  
 (秀泉)  
 冷やつこ女房へ缺けたまゝ残り  
 (三太郎)  
 古川柳とくらべて時代のうつりかわりを、食味の上にも見られるのは、面白いと思ひます。

終

麻生路郎著 水武書房版



川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書  
 本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して收むると、ころ三十七講、平明で親切で、初心者には本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

B6版 二二二頁 定價 一〇〇円 送料 金十二円  
 取次御注文は 大阪市住吉區萬代西五丁二五番地 川柳雜誌社  
 電話口振大阪七五〇五〇





# 旅の柳川

他共・會大柳川人道鐵本日西

ひところ、車中の誰も彼れもが、  
ヤミの買い出しに見えて不愉快だ  
つたが、近ごろは又楽しい旅に戻  
つたようである。駅裏が右往左往  
するのうれしい風景である。

大阪駅では、牛乳も賣つている。  
みかんも賣つている。新聞雑誌も  
賣つている。タバコに、栗おこし、  
天麩羅にたき出し、ハモ料理にカ  
ツレツまで賣つている。片ツ端か  
ら買つてではないが、何んでも賣  
つてゐると思つと、心がユツタリと  
して何んとなく愉快である。これ  
でこそ旅は楽しいのだ。殊に川柳  
の旅は楽しいものだ。ゴトン／＼  
汽車が揺れているうちに、心は  
もう目的地へ飛んでいる。それが  
未地の地であるうと、曾遊の地で  
あるうと、土地よりも人にあるの  
である。柳友に会いさえすれば、  
すべては充たされるのである。  
今度の旅は、四月廿三日に廣島  
縣廿日市の鉄道職員會館で開催さ  
れる第七回西日本鉄道人川柳大會  
の講演に招かれたので、廿二日の

朝、七時廿五分の二三等急行で發  
つた。私は外人と乗合せた。彼は  
途中で下車するまで雑誌を読ん  
でいた。車窓は菜たれ、げんげ、曼  
珠沙華に彩られていた。

私は車中で、朝食をとつた。飯  
路をすきてから、カバンから「夕  
刊山陽」の選句を出して、選後評  
を鉛筆で書いた。岡山で満年氏の  
顔が見えたら手渡しするつもりで  
岡山駅へつくまでに、兎も角も書  
きあげた。岡山駅では、行を共に  
する浜田久米雄君の顔が第一に眼  
に映つた。大森風来子、山分淑郎の  
両君が車窓に顔を見せられた。  
汽車が岡山を離れる間もなく雜  
役が、車内の掃除をさせていただ  
きますと云う挨拶をした。このア  
イサツは私をうれしくさせた。無  
断で、車の端から端まで、埃りの  
宿替をさせたり、竈や喰べ行く  
の折をガラ／＼と箆で運んで行く  
のはたまらない不愉快な味は、  
されるからである。  
廣島で、急行を乗りすてた。ま

だ少し時間が早いので、出迎えら  
れた淡本氏、紫浪氏と久米雄君と  
私の四人で八丁堀へ出かけ、キリ  
ンビヤホールでコップを傾げた。  
洋食は大阪の方が安いので、久  
米雄君が云う。そうかも知れない、  
大阪ではもう競争が激しくなつ  
ているから、安くてもうまくなけ  
ば賣れないことになつてゐる。  
十七時十分で廣島を發つた。淡  
本氏は明日の朝出席しますと云つ  
て帰宅された。私達は宮島駅まで  
乗り越し、電車の宮島駅から逆行  
し、地御前で下車して廿日市の鉄  
道職員會館に入り、そこで一泊し  
た。紫浪氏は朝来ますと云つて九  
時半頃帰宅された。各地からの出  
席者も一泊されているらしかつた  
が、顔を含はさなかつた。

兼題の選は人間(路郎)栗おこ  
し(水客)港(蘇堂)工場(錦鬼)  
久米雄(米)伯峯(原爆)半休門  
(ふぐ) 席題の選は井蛙(急停  
車)正一(無一文)十進(すべり  
台)三朗(婦人科)青丹子(共学)  
であつた。私の軸吟は「自殺自殺  
僕貫一になりきれず」「君とあれ  
ば我は痴人の部に属し」の二句  
十八時から懇話會が行はれるの  
で、それまでの時間に、宮島へ出  
かけた。鳥居のすぐ手前まで潮が  
來ている。潮の干てるまで、久  
米雄君が一行をカメラに入れた。  
私は曾て、下関の市多様君等とこ  
こに遊んで撮影したことを思い、

## 動★靜

▼本社五月例会は六日午後六時か  
ら大室文化會館で開催。川雜大阪  
南支部會は五月廿日午後六時か  
ら阿倍王子神社で開催。大阪通信  
病院川柳會は五月十四日午前十時  
から有馬吟行を開催した。千石莊川  
柳會員塚田は五月十一日午後二  
時から開催。白鷺川柳會(大阪市)  
は角一ビル株式会社豊洲工場文化  
室で開催。南海鉄道川柳會は五月  
二十九日午後五時半から川雜難波  
連絡所で開催した。南区医師會文  
化部川柳會は五月二十三日午後七  
時から生々庵居で開催。西日本鉄  
道人川柳大會は四月廿三日午前十  
時から廣島縣廿日市鉄道職員會館  
で開催。小郡鉄道職員俱樂部(山  
口縣)で四月廿四日、下関鉄道局  
管理部主催の下に路郎主幹は「旅  
と詩人」と題して講演。湯田温泉  
小集(山口縣)が四月廿四日夕刻  
から湯田保健所で開催された。▼下  
関鉄道局管理部主催で四月廿五日  
午前十時から職員俱樂部で路郎主  
幹は「旅と詩人」の講演。川雜下  
関支部川柳大會が、上記の会場で  
十三時から開催。路郎主幹は「い  
のちある句を創れ」と題して講演  
▼ふあうすと川柳社二十周年記念  
招元紋太氏還曆祝賀川柳大會(神  
戸市)が四月廿九日午前十時から  
須磨の樂々園で盛大に開催された。  
以上何れも路郎主幹出席。▼全信州  
川柳大會が五月三日、松本市で開  
催され、しなの川柳社から大會記  
念に川柳手帖が全参加者に贈られ

た。▼川雜岡山支部では四月廿日岡  
山農業博覽會協賛川柳會を同会場  
で開催した。▼川雜岡山大学支部創  
立會が五月六日医学部記者室で  
開催された。▼川雜、ウエ支部四月  
句會は二日に商工會館で開催され  
た。▼句集「壺」が昭和廿五年四月  
廿六日に刊行された編輯兼發行人  
代表は水谷鮎美氏(非賣品)▼  
「せんりゆうのおと」が昭和廿五  
年四月に今治市神明町文学社から  
上梓された。小堀本三四一、ジ一  
部廿三四送料共。高橋かうたる氏  
(下関市)は路郎主幹に冬時季に  
再度の來遊をすゝめ「河豚血に藍  
がういてえ差し向ひ」の句を寄せ  
られた。▼荻野漢水氏(岡山縣)は  
第五回夕刊山陽記者文藝川柳「花  
見」の第一席(賞金千円)に當  
選された句は「一年寄りを花見に出  
てほごきもの」▼木村草々氏  
(大阪府)は昨年来、令閨が病苦  
になやまされていられるので作句  
も怠つていたが、作られれば川柳熱  
けます／＼燃えるばかりたとて  
「子が三人病も身を起きて台所」  
の句を寄せられた。▼長宗白鬼(兵  
庫縣)は東尋坊、若原温泉、永平  
寺を巡り、片山津温泉から通信を  
寄せられた。

## ★社の黒板

▼川柳雜誌社支部・岡山大学川柳  
俱樂部が五月に岡山大学内に新設  
された。幹事は大森風来子氏。▼川  
柳雜誌岡山支部は岡山市下出石  
町六二ノ一藤本滿年氏方へ事務所  
を移した。



世話好きの市多樓君が生きていたに勿論今日の会に参加しているのらと思つと、何んとはなしに涙ぐましくなつた。一行は宮島を十七時廿七分で宮島口へ、そこから電車で会場に戻り、懇親宴に移つた。出席者は遠く山陰からもあつて教をつくりてこゝに大会を終え私たちは更に一泊した。

廿四日の朝、会場を辭し、長野井蛙君と宮島駅を七時廿八分に發つて十時半に小郡駅に着いた。高橋氏(下関)、山田氏天本氏等に迎えられ、小郡鉄道職員宿泊所の離房で晝食をとり、十三時から約二時間、鉄道俱樂部で職員諸君に「旅と詩人」の講演をした。晝食の時から雨となつたが講演を終つたら雨があがつていた。

十五時廿分、小郡駅を發つて湯田駅に向う。十六時すぎ湯田鉄道保健指導所に入る。雨となつた。つゝが美しい。十六時三十分から小集を開いた。題は「内湯」。出席者は下関管理部の山田氏、天本氏、下関駅の岡藤市氏、國弘牛休門氏、小郡駅の長野井蛙氏、藤津柳虹氏、下関市の高橋かうたる氏と私の八人であつた。拙吟は、「父ひとり帯らず内湯灯が点り」で温泉に浸つて夕食、こゝに一泊。

廿五日の朝、空はカラリと晴れていた。寢床から首を出して、かうたる氏と昨夜の残りを酌む。のんびりといふ氣持になる。八時六分、湯田を發ち八時廿四分小郡着、八時四十分小郡駅發、下関へ向つた。下関へ着いたのは

十時すぎだつた。十時半から下関鉄道俱樂部で約二時間職員のため講演。櫻川不水君や岩崎勇記夫妻や中村久呂平君などの顔も見えた。

十三時から同じ会場、川難下関支部の川柳大会が開催された。下関柳界の長老藤井米三氏、劍花坊派の錚々たる藤井赤とん坊氏、大陸から小倉に引揚げられた山口夢詩朗氏等も出席され盛會だつた。私は講演に、兼題三題の選句に、揮毫で夕刻に及んだ。

私の平家蟹を詠んだ句は、君いつか笑う日ありや平家蟹、今もなほ時利あらずと平家蟹であつた。閉會後、下関鉄道局職員會館で私のために一席設けられた。出席者は不水、夢詩朗、九呂平、赤とん坊、牛休門、米三、坂田博士、かうたる、茶人の諸氏であつた。この夜私はそこに眠つた。

翌廿六日早朝、かうたる氏が來訪された。朝食をすましたところへ、牛休門君が自動車で迎えに見えたので、かうたる氏と牛休門君に向つた。牛休門君は遙かの高見にあつた。港が一望の下に見える、宮本武蔵で名高い巖柳島も見える。しかし、高見だけに、水には不自由だろうと思つた。奥さんとは初対面だつたが、初対面の氣持はしなかつた。

こゝで一杯傾けながら、下関駅の文化板えの揮毫をした。九時すぎに、下関病院長の坂田博士と、中村久呂平氏が自動車で迎いに來

られたので、十時に駅まで出た。それから松村院長に会い、時間が来たので、ホームに出た。

そして、松村下関院長、坂田下関病院長、かうたる氏、赤とん坊氏、牛休門氏、勇記夫妻、素人氏、九呂平氏、茶人氏等の見送りをうけて意義ある川柳の旅を終えた。帯途小郡駅では車窓に井蛙君と二女流作家の見送りをうけた。

十八時四十五分に岡山駅についた。下関から牛休門君が電話されていたので、岡山駅へ着くと、久米雄君、風來子君、七面山君、淑郎君等の顔が車窓に見えた。このまゝで帯阪すれば大阪へ深夜につくので、四時間を岡山で消すことにして久米雄氏の案内で駅長室に入った。

暫く皆と岡山の柳界について語り合つたが、汽車の時間の都合で、風來子君が先づ降り、次で七面山君が降りた。久米雄君の案内で、淑郎君と二人で盃を手にした。そして零時五十分岡山駅發で一路帯阪の途についた。

翌廿六日の六時頃帯阪したが、眼を閉ざると、こゝ五日間ほごに會つて來た柳友たちの顔、顔、顔が私のまぶたに追つて來るのを覚える。私はビールを抜いて霞乃と乾盃した。無事川柳の旅を終えたよるこびに外ならぬのである。いろいろ御配慮下さつた方々に深く感謝の意を表して撰筆する。(藤生路郎)

### 不朽洞會から

渡辺孫搦博士(大阪)は放射線醫學の權威者であるが四月十七日金沢で開催された放射線醫學總會に出席されたとのこと。岡島嶺泉氏(大阪)は二月初旬息女和枝さんに御全婚を迎えられ琴瑟和らされているとのことお欣び申上る。日縁之助氏(出雲市)は四月廿四日東京都へ廿八、九日頃來阪されたが東京長隨伴のため柳友に會はず。帯國された石浦柳水氏(大阪)は北区堂島上二ノ四五三賞興業株式会社の新事業のため五月初旬鹿兒島方面へ出張された。藤本潤年氏、藤本茶々氏(四月廿三日、岡山市下出石町六二ノ一に轉居された)富士野駿馬氏(清水市)は全國浴場新聞第十五号に「江戸川柳に見えるお湯錢」を執筆された。櫻川不水氏(山口縣)は業務用で五月十二日岡山へ出張。淡田久米雄氏と久々に飲談されたとのこと。村田流水氏(ホノル、市)は四月廿三日訪日。五月八日來阪されたので、路郎主幹は生長の家會館で同様に面談の結果、十日午後一時更に流水氏が川難波連絡所に「海外川柳句集」の打合せのため路郎主幹を訪問された。なほ同氏は十四日の大阪通信病院有馬吟行に参加された。

丸山弓削平氏(岡山縣)は弓削の人々の句集「川柳町」を近く發刊されると。吉川水車氏令(名古屋)は婦人科に入院手術されたが、その経過は良好とのこと。

なほ同氏は東京の宇野沢組鉄工所の組合機關誌に毎号「川柳の話」を寄稿されている。蛭子省二氏(愛媛縣)は「夏時間學問もなく食過ぎる」の句信を寄せられた、食ふと申しても配給では不足となり申候と附記も姫田夕鐘氏(徳島縣)が四月廿一日にならば連絡所に來所された。路郎主幹と須崎豆秋氏と飲談された。河村日満子氏(鳥取市)は日の車丸自動車社の人情社長が急逝されたので追悼句會を開催されるとのこと。橋本美奈子氏は健康を害されたので五月限退会されることとなつた。

### 川雜案内

六号活字十四字詰三行  
金百円、一行増すこと  
に金折付(但し前金切  
手代用可)  
改裝、修繕、句會案内  
換書廣告、その他

せんりゆのおと 廿三四發料共  
今治市神明町 長野軍三郎  
振替廣島四九三三番

川難旧夢 残部あります、希望  
の方は号数を往復ハガキで照  
合されたし 本社

電話開通・岡山四一〇九番で  
す。コイ一句とおくされ  
たい。 藤本潤年

「食」の句を募る  
大阪市南区難波新地四番丁  
北極星文化部「食文化」編輯部

**胃酸過多**  
胃痛・胃潰瘍に  
**ノルモザン錠**  
45錠入  
大坂・武田藥品工業株式會社





# 六世川柳

## 富士野鞍馬

つまらぬといふは小さな智  
と能筆で書かれた扇面を所持  
してゐたが、戦災で焼いてし  
まつた。これは六世川柳自信  
の句で、東京三囲稻荷社境内  
に五世の「やはらかでかたく  
持ちたし入ごころ」と共に句  
碑に刻まれて今に残つてゐ  
る。この句碑は明治十四年五  
月に建てられたもので(五世  
のは明治三年に築地本願寺に  
建てられたのを移した)この  
建碑記念会の句集が、十五年  
の春「しげり柳」として発刊  
された。

めは次のような句が入選して  
ゐる。  
伽羅の香のある油揚の賣れる  
事 (一一二)  
親父が匙を投げたのを医者が  
咄ひ (一一三)  
木綿一反福祿壽ほうかむる  
(一一四)  
心願を汲分けたまふ井戸の垢  
離 (一一五)  
掃りはまよと氣のたれる成  
川連 (一一六)  
ひごい生酔喚つた蚊も酔つて  
ゐる (一一七)

翌天保四年には  
松歌追福会  
木食の眼にもうれしい稻の出  
來 (一一八)  
十九鷹、柳糸追善会  
かしくも知れぬ日出度い薬  
鍋 (一一五)  
市ヶ谷八幡奉燈句合  
よく泣いて買人の多い籠の鳥  
(一二七)

六世川柳は安政五年(一八  
五八)父五世の歿後家業の魚  
問屋と共に継承したのであつ  
た。水谷謹、通称を金二郎とい  
ひ、はじめは父と同じ「鯉斎」  
をとこなえ、後「和風亭」とい  
ひ、「ごまめ」と号してゐた。  
これは父のタツクリと同意で  
あるところに魚屋の趣向があ  
つた。柳樽にはじめて見える  
のは、天保三年の成田不動奉  
願大会の時で、十九歳のごま

天保五年には  
大柳会  
ナルホドゆたかと指を三本  
折り (一一三八)

オオム当惑早言の法性寺  
(一一三八)

諸國名所  
芝浦へ日ざしほごつくいわし  
(一一四〇)

船  
その頃は隅田に櫻もありやな  
し (同)

壽筵会  
院縫に美音のまじる嵯峨の奥  
(一一四三)

櫻木会  
大地震五百羅漢は鉢合せ  
(一一四四)

江戸川会  
名は不破といへど勇士の数右  
衛門 (一一五)

百人一首  
餅の外ふくれつらせぬ三ヶ日  
天保六年には

紅葉狩錦のまどろ  
獅子の娘蹴落した値で女街買  
(一一四一)

和歌堀会  
大物は実に弁慶も手に余り  
(一一四二)

市からぐれてお多福を高く買  
い (同)

大柳会  
矢立の頭ぬけ太子様御所持な  
り (一一五四)

御田八幡奉願  
公家夜詰衛士温石を頼まれる  
(一一四九)

花王木会  
雅が無雅か櫻を折つて遣ひ物  
(一一五〇)

和歌堀連吉例相撲会  
雪隠をやつとあければ嘘が出  
る (一一五六)

葉柳会  
鐘つきに若荷喚せん花盛り  
(一一六一)

返されもせず本復の記念物  
(同)

七年、八年の句が柳樽に見え  
ないのは、その当時江戸各地  
で句会が盛んに催され、その  
句会報を次々と柳樽何編とし  
て出版してゆくのに、いつも  
順次不調になつて、九年の百  
六十七編までに収録出来なかつたのであろう。

常にごまめは父と共に句会  
へ出席してゐたが、眞砂会へ  
は出てゐず、株木や二代目木  
卯の会によく出てゐること  
は、その頃の組連の交際振も  
わかる。

天保八年には父柳が五世川  
柳を襲名した。そして九年正  
月のその名弘会にごまめの句  
が見えないことは、一寸不審  
であるが、これもその会の世  
話で忙しかつたのであろう。

天保九年の作としては  
一月の吉例角力会  
(一一六四)

うま過ぎた芋箱舞の頬が落ち  
四月の如雪追善会  
経藏にひとし智識の腹の中  
(一一五三)

石を抱いて淵に入る鳥左近  
(同)

等が見え、柳多留はこの年に  
終編になつてゐる。これから  
二十年経つて、安政五年に、  
五世が亡くなつたので、すぐ

にごまめが六世を家業と共に  
継いだのであつたが、有名な  
安政の大獄事件の年で、國內  
騒然としてゐた時、よくこの  
狂句を續けて努力したもので  
ある。

明治三年には五世の十三回  
忌追福大会を催して、その句  
集「柳の榮」三巻を出し、又  
有栖川宮一品親王に拜謁し  
て、御直筆の御歌短冊を賜つ  
たといふこともきいてゐる。

明治十五年六月十五日、六十  
九歳で永眠、築地本願寺に葬  
られ、その追善誌を息子の磯  
太郎が出した。そして七世は  
姪の掣、浅草の煙草問屋、廣  
鳥氏、風也坊雪舎が継ぎ、六  
世の一週忌を兩國の方八で、  
二晝夜に亘る大追善会を営  
み、明治十九年に初代川柳百  
年祭を大々的に営んで勇退し  
たのであつた。

六世の辞世はわからないが  
つまらぬといふは小さな智  
恵袋

は今に有名である。結局柳樽  
から見る六世川柳は、十九歳  
から二十五歳まで五年間の新  
進時代の一部分だけしかわか  
らない。

然し江戸から東京へ、この  
短文学を背負つて、持続けた  
功績は偉大である。







大阪南支部句會 (大阪府)

四月十五日 於阿倍王子神社

若返り給へと赤い灯がともしり 同  
若返る注射を頼む春の宵 小松園  
せめても赤いネクタイ買つて来る 修三  
若返り教へる方も酔ふて居る 小松園  
女房もその氣になつて若返り 万葉  
若返り舌出されてゐるとは知らず 星登  
ネクタイと靴を見よと若返り 白柳子  
若返り道頓堀でけつまつき 文蝶  
若返り君待ち給へとはうれし 鮎美

席題「灰皿」 清水白柳子選

祝務署の灰皿が知る金詰り 一郎  
掛合はかざらず灰皿へぐつ消し 晴峯  
灰皿をみつめた儘の恥かじさ 翠光  
灰皿に突き差す方が理に詰まり 小松園  
灰皿へ独身住ひの趣味をみせ 葉  
灰皿をかたづけたがる社員と居 里十九  
灰皿の要る女客にて多弁なり 正司  
末の子が灰皿さげて来てくれる 古方  
灰皿をひつくり返す兒に慌て 淡舟  
灰皿へ又鉛筆の芯がをれ 春柳  
灰皿を見つめたまゝの無心也 生々庵  
灰皿の山盛個性とや言はん 淡舟  
白磁の皿に灰おちる朝 古方  
灰皿へのんびり人を恋してみ 白香  
落ちそうなのえ灰皿を持つてゆき 梧槽  
灰皿を探がす煙草の切れた朝 生々庵  
灰皿へ吳越同舟の煙を上げ 小松園  
灰皿へ夫が喫わぬ訛を添え 奥三郎  
その箱を灰皿にて激論す 野介  
灰皿の或る日其の儘朝になり 三波子  
懇親会末座灰皿取りに立ち 花村  
灰皿も提げ縁側へ座りかへ 万葉  
暖かくなつた灰皿さないした 芦穂  
灰皿はしびれの切れた鼓を受け 翠光  
灰皿へ届かぬ椅子で議事が済み 與三郎  
病妻へ灰皿そつと遠ざける 晴峯  
未亡人矢張り灰皿ありはあり 白柳子

手酌を懐しむにやとな承知せず  
片付ける妻を尻日に手酌なり  
刺青も美しく手酌馴れたもの  
黙々とした手酌へ妓すげに来る  
頭痛背貼つた手酌はグイと飲み  
ウイスキー手酌でのむに高きまで  
お手酌へ女將は後のカンをせず  
腹立てた手酌はいせん出せと言ひ

岡山支部句會 (岡山)

三月二十五日 於弘済会ハウス

春の装ひ・看護婦・上と下・赤字  
春らしい約束がある告知板 聴夢  
芍薬の出さればならぬ芽を出して 久米雄  
看護婦の親切誤解してうける 十九平  
看護婦の心配そうな医者の留守 紫月  
なじめない看護婦さんは綺麗すぎ 淑郎  
消毒をして看護婦は握手をし 淑郎  
臨終の隅で看護婦動かさない 久米雄  
看護婦の夢遙かなり母の國 淑郎  
視線と視線合つて二階が締められる 吉備平  
社長の夢給仕の夢も金のこと 瀧年  
はつきりと赤字出張から戻り 聴夢  
お隣りの赤字へ妻は安心し 七面山

大牟田支部句會 (大牟田)

四月二十日 於三池染料保安課

素振りとは別に達者なアゴを持ち 鶴堂  
素振りをあの娘の素振りに教えられ 一葉  
素振りかあ重役らしい食堂事 抱逸  
相愛の男の素振りに目が光り 抱逸  
強健な母体なるほご子沢山 抱逸  
心臓の強さをくじく一つ鐘 抱逸  
強い子とほめて掃りを歩かす氣 抱逸  
交又点ピリ／＼と今日も暮れ 抱逸  
闇もおんやぶにされた交又点 抱逸  
アベツクへやぶにされた交又点 充葉  
甘党と意見が合はぬ頭割 抱逸  
甘党と見えぬ縣議の赤い顔 同

品質優良  
先カペン  
TACHIKAWA PEN  
大阪府東区豊後町四八  
立川商事株式会社  
タチカワペン  
タチカワセム  
タチカワ  
タチカワ

久賀支部句會 (山口縣)

二月二十六日 於路三居

野次馬へホースの水がありあさり 水郷  
腕跡へゆうべを語る人だかり 三休  
火事見舞名譽のようにねれて来る 水郷  
近火見舞ボンッを押さうもえん 路三

川雑部 ウイロー社句會 (布哇)

一月二十二日 於商工全館

腹にない約束よりも欺したり 我樂多  
心にもない約束を子が覚え 同  
人前は親方氣分で約束し 盆丘  
結婚を約束させて身を任せ 紅宿  
氣休めの約束妻に見すかされ 快夢起  
子には子の約束がある日曜日 友郎  
約束の日は近づけご当もなし 芳雨







趣味と教養の殿堂

# 松坂文化クラブ

## 会員募集



題目  
 演説 (小原流・末生流)  
 茶道 (安千家流・宗翁)  
 洋裁・書道・日本舞  
 柳曲・聲楽  
 手鏡・古典・新舞劇  
 授領・小唄・謡曲  
 服飾デザイン

詳細お問合せは  
 七階文化クラブ事務局へ

### 松坂屋

大阪日本橋  
 電用一七一番

シマスに ヨクキク

# 大眼目薬

結膜炎  
 トラホーム  
 つかれ目

大眼目薬

酒販用紙コップ  
 アイスクリーム用紙コップ  
 其他食堂用紙製品一切

大阪市阿倍野区晴明通一丁目  
**特殊紙器工業株式会社**  
**フタバカップ株式会社**

電話 天下茶屋 (06) 二二八〇二  
 三三九一

最短時間で結ぶ

# 大阪一名電

3時間25分  
 近畿日本鉄道

毎日3往復

区間指定制  
 特急料金 ¥50

上本町	7.40	12.40	16.40
各駅	8.05	13.05	17.05

### 編輯室にて



▼いい時候になった。もうワイシヤツのまゝで筆が執れるようになった。▼前号に發表した座談「川柳路」の噴火山的な熱句評に對しての反響は多大であつた。「川柳雜誌」ならではと云う好評もあつた。七面山氏の肉休川柳に對して結美氏の支持者もあつた。▼本号の表紙「踏切小屋」は由比種三郎画伯を傾けした▼本号の「川柳路」は私が川柳の旅に出たあとで龍乃、亞鐘、豆秋、野介の四人での座談である。▼福田山雨俊氏は「川柳と社會性」で論陣を張つた▼「雑筆春秋」欄は段々賑やかになつて來た。東野大八氏の「天皇様と川柳」、安川久留美氏の「宗教である川柳」、須藤豆秋氏の「言葉の水車」、戸田古方氏の「偶像」、吉田水車氏の「閑話」、静岡忠八氏の「辛抱と反省」、水谷竹莊氏の「川柳料理」等盛り沢山となつた▼富士野鞍馬氏は「六世川柳」を寄せられた。▼例によつて柳人の号中廣告を募る季節となつた。本誌發展に協力する意味から一日でも參加していただきたい。(別欄廣告参照) 特にお願ひする。

Made in Occupied Japan

（戰轉策）

# 川柳雜誌

一冊 金三〇円 (送料三円)

B列5号 毎月一回一日發行

牛ヶ年概算 金一九八円  
 一ヶ年概算 金三九六円

昭和廿五年五月廿五日印刷  
 昭和廿五年六月一日發行

大阪市住吉區片町四丁目二五番地  
 行印製版 麻生 幸二郎  
 發行所 **川柳雜誌社**  
 電話 日座 大阪 七五〇五〇

### 投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記す。事。

▼「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募る。

▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。

▼「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

### 募 集

課題吟募集

(十句) 清水白柳子選 (六月廿五日締切)

ビール (十句) 菊沢小松園選 (七月廿五日締切)

毎号募集

近作柳樹 雑吟廿句 麻生路郎選  
 川柳塔 (雜 詠) 麻生路郎選  
 文章 (評論・研究・感想其他) (廿五日締切)